
1年前

夜威化南

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

1年前

【Nコード】

N0109Q

【作者名】

夜威化南

【あらすじ】

1年前に起きた彼女の別れから立ち直ってきた、主人公^{こうき}光輝の恋愛小説

過去

1年前の8月、その日は太陽がすぐ近くにあるのではないかという錯覚を起こすほどの暑さに襲われていた。

だが今日は久しぶりの休暇ということもあり1ヶ月に一回できるかどうかの彼女とのデートだ。

暑いのを我慢してクーラーがある家を出る。

デートの待ち合わせ場所に30分前につけてしまった光輝ひつぎは涼しいコンビニで時間を潰すことにした。

汗も乾いてきたところで待ち合わせ場所にもう一度行くと5分前にも関わらず彼女の沙織さおりは時計を気にしながら辺りを見回してる。

光輝「さおり！」

と呼ぶと、沙織のニッコリした顔がこっちを見る。

髪の毛は長髪の黒。21歳の一年下で身長は150.2という少しちっちゃめのかわいらしい子だ。

走って近寄ると、間髪をいれずに真剣な顔で沙織は言った。

沙織「カフェ行こっ！」

光輝はその真剣な顔を感じたからなのか、すぐに了承した。

光輝「うん、わかった行こう」

カランコロンとカフェの扉を開ける。

そこには幼馴染の夏穂なつほがいた。

一緒に幼稚園ということもありよくちっちゃいころ遊んだ同い年の子だ。

髪の毛の長さは普通で色は茶色。身長は155.6。あと特徴といえは何か毎日のように帽子をかぶってるということだ。幼稚園のころにその帽子について聞いたなら泣き出してしまったのでそれ以来その帽子については触れていない。

夏穂「光ちゃん！！」

光輝「おう、夏穂！久しぶりだな！！ここでバイトしてたんだあ・・

・」

夏穂はこそそと話す

夏穂「ここ、意外と給料もよくて仕事内容もたいしたことないから
楽でいいのよ」

光輝「お前はすぐに金だなあ・・・」

夏穂「金だけじゃなくて好きな人もいるもーんだ」

夏穂は頬を赤くしながらちっちゃい女の子のように言った。

光輝「へいへい。まあ二人だから席案内して」

ひよこつと沙織が出てくる

夏穂は一瞬驚いた顔をして席に案内した。

沙織が真剣なまなざしでこちらを見ながらいう。

沙織「ちよつと大事な話があるの・・・」

光輝「おう、どうした？」

沙織「私たち、結婚の約束したわよね？」

そうだ。沙織とは俺からプロポーズして結婚する約束をしている。

光輝がそのプロポーズのことを思い出していると沙織は言った。

沙織「ごめん・・・あれなしにできないかな・・・？」

光輝「どうしてだよ・・・!？」

といった。

意外と大きな声が出てたようでカフェにいた客たちがいっせいにこ
ちらを見る。

そこに店員がやってきて

店員「喧嘩なら外でやってきてくださーい」

と言ってきた。あまりにも親切とはかけ離れてるような言葉だった
ので店員の方を見て怒ってやろうと思ったら、そこには短髪でアイ
ドルではないかと聞いてもいいようなかわいらしい子がいた。

光輝「あ・・・す、すいません。もう終わるんで・・・」

店員「はいはーい！おはやめにー」

少しムツとしたが気にせずに沙織の方を向いて

光輝「どうしてだよ？」

と聞いた。

沙織「私のお父さんってアメリカで仕事してるって言ってたじゃない？」

光輝はうなづく

沙織「そのお父さんなんだけどね・・・アメリカで入院しちゃって・・・ちっちゃいころからお母さんもないしお父さんと二人暮らしだったからそこで看病できるのは私だけなんだよね・・・」

光輝「そんなの看護婦に・・・」

と言いかけてやめた。小さいころから二人暮らしのお父さんが突然入院したのだ。大事にするのは当たり前だ。

少し間が空いて

光輝「もうどうにもなんねえのかよ・・・」

と光輝

沙織「だから私たちもここまでなんだ・・・退院したらまた会おうね！」

そして何も言い返せないまま俺たちは別れた。

2年間たってもまだ退院の知らせは来ない。

2年前のその日から仕事して帰って飯食って寝て、そんな生活が続いてる。

周りから見たらそれほどのことじゃないのかもしれない。だがそれほど沙織の存在は大きかったのだ。

時々、夏穂が心配しに家に来る。まだカフェでのバイトを続けてるらしく、バイトの話をよくしてくれる。元気付けようと夏穂なりの気遣いなのかもしれない。

夏穂に誘われてちよくちよくカフェに顔を出すようになった俺は今日もカフェに向かって歩いていった。

ランコロンと店内に響く。

店員「いらっしやいま・・・げ、光輝！」

光輝「げってなんだよ！げって！夢菜！」

2年前の喧嘩の真っ最中に注意してきた短髪でアイドル顔の子だ。

年は同い年の19歳らしく、生意気やろうだ。

夢菜「あんたさぁ・・・最近すごい頻繁に来るけど私のストーカー？」

そんなわけないが少しからかいも含めて

光輝「そうかもな」

と適当に言ってみる。

返答がなかったので夢菜の顔を見てみると少し赤くなっていた。

夢菜「お客様こ、こちらへどうぞ。」

思いつきりスルーされたが、少しからかいの効果はあったみたいだ。席に座るとあいさつもなしに夏穂が来て

夏穂「一杯分店長がサービスだって」

と言ってきた。

光輝「おお、夏穂。サービスかありがとよ！店長にも言っておいて！」

夏穂「はいはい」

とウインクしてきた。

光輝（夏穂も普通にしていれば可愛いんだけどな・・・）

そのとき店内の奥隅まで響くように携帯が鳴り響いた。

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0109q/>

1年前

2011年1月11日20時59分発行